

2016年1月30日(土) 第9回「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品
「ブラザー・サン シスター・ムーン」の見どころ
BROTHER SUN SISTER MOON 1972年製作 121分

上映前

●アッシジのフランチェスコ(1182-1226 12世紀～13世紀の修道士。44歳没)の半生の伝記。

●監督:「ロミオとジュリエット」と並ぶフランコ・ゼフィレツリ(舞台監督でもある)の会心作で、後作で感情過多&大仕掛けになっていく前の、素直で押さえた演出が“自然体の若者の純粋さ”を心地良く見せてくれる。

●ゼフィレツリが助監督として付いていたルキノ・ヴィスコンティ組が大挙して参加している作品:「ベニスに死す」「若者のすべて」「山猫」「郵便配達は二度ベルを鳴らす」「地獄に堕ちた勇者ども」「夏の嵐」

脚本: スーゾ・チェッキ・ダミーコ、ケネス・ロス、リーナ・ウェルトミューラー(女優映画監督)ら4人のリアリズムを重視した人間描写。

撮影: エンニオ・グアルニエリが心に染み透るような映像美(自然)で、めったに見る機会のない12世紀後半のイタリアの風俗も忠実に再現された作品。

●音楽: フォーク・ミュージックのドノヴァンを起用し、1970年台の“ラブ&ピース”や“ヒッピームーブメント”の精神も意識して採り入れている。(「ジーザス・クライスト・スーパースター」等の影響も)。

ドノヴァンは、挿入歌と共に映画と同名の主題歌を書き下ろし、歌っている。曲はフォスターの「オールド・ブラック・ジョー」(♪若き日、早 夢と過ぎ)によく似ている。

●出演: イタリア中心の製作陣と対照的に俳優陣は英国役者が中心で、主演のグレイ

アム・フォークナー、ヒロインのジュディー・パウカーを始めとして、アレック・ギネス、ケネス・グレイム、ピーター・ファースらがイタリア勢であるヴァレンティナ・コルテーゼやアドルフ・チェリと違和感なく溶け込んでいる。特にキアラ(クララ)に扮したジュディー・パウカー(17歳)の“純真無垢を絵に描いたような美しさ”は透明な清純さを匂わせていて、本映画の示す“澄みきった精神性”を神々しく体現している。

上映後

●フランチェスコの生き方をひと言で⇒「純粋」

●クリスチャンでなくても全く観賞に支障のない、純粋な若者の精神と青春の彷徨・挫折→自己の啓発→仲間の集合→活動の躍進をに心洗われる作品(文学で言えば、「車輪の下」「デミアン」(ヘッセ)であり、“花の咲き誇る野原や、紺碧の青空、澄み切った海、純粋な瞳があれば世界は十分に満ち足りている”ということを出させてくれる映画。

●ヴェトナム戦争(1975 終結)が泥沼化していた冷戦下に作られた映画で、“人間の生き方を根本から素直に見つめよう”という、当時の良識派の愚直なまでの真摯な想いが結晶化した清涼な作品。戦争で身も心も傷ついた青年が、人間の素朴な幸福への希求、人間性への回帰へと、灰色の心象風景から立ち上がり、鈍く輝く現実へと踏み出していく様を実に清々しく描き出している。

●映像美: 冒頭、霧の中から現れる町の幽玄な美、フランチェスコが屋根の上で小鳥を追う目覚めの場面の美しい構図。広大な原野が四季を越えて色合いを変え、その中

に、フランチェスコたちの小さな教会が徐々に姿を現していく様子。

極めつけ、クライマックスのローマ・カトリック教会での一連のシーンは、まるでヴェラスケスの絵画がそのまま動き出したかのような壮麗な美の極み。

●他の聖フランチェスコを描いた作品:

- * ロッセリーニ(&フェリーニ)の「神の道化師、フランチェスコ」
- * マイケル・カーチスの「剣と十字架」
- * リリアーナ・カヴァーニの「フランチェスコ」(フランチェスコには膨張前のミッキー・ローク!)

アッシジのフランシスコ(フランチェスコ)

フランシスコ会(フランチェスコ会)の創設者として知られるカトリック修道士。中世イタリアにおける最も著名な聖人のひとりであり、カトリック教会と聖公会で崇敬される。また、「シエナのカタリーナ」と共にイタリアの守護聖人となっている。

●名前の表記: イタリア語の原音表記では「フランチェスコ」だが、日本のカトリック教会ではアッシジの聖フランシスコと呼び慣らわし、典礼暦には「聖フランシスコ(アッシジ)修道士」と記載されている。彼の名前を冠した、彼自身によって創設されたフランシスコ会もそれに倣い「聖フランシスコ」の呼称を採用している。なおアメリカの地名「サンフランシスコ」もここから取られた。

●現代に与えた影響:

- ① シモーヌ・ヴェイユ 祈りへの促し:フランチェスコに強い関心を寄せた思想家として、20世紀前半のフランスの女流哲学者シモーヌ・ヴェイユが知られる。シモーヌ・ヴェイユは『神を待ち望む』(1950)のなかで、ペラン神父にこう打ち明けている。「サンタ・マリーア・デッリ・アンジェリ教会の12世紀の小さな礼拝堂は、比類のない清らかさをたたえており、そこで聖フランチェスコはよく祈ったのです。生涯で初め

て私は何か私よりも力強いものに促され、ひざまずいて祈ろうと思いました」と。

- ② ヒッピー「アッシジのフランチェスコに帰れ」運動 ⇒何ものにも捉われない自由な生き方:

アメリカ合衆国カリフォルニア州を発祥の地として1960年代から1970年代にかけて世界的な広がりを見せたヒッピーのムーブメントでは、しばしば「アッシジのフランチェスコに帰れ」が標榜された。

- ③ 「自然環境保護(エコロジー)の聖人」:

1978年から2005年まで教皇位にあったヨハネ・パウロ2世は、1980年、フランチェスコを「自然環境保護(エコロジー)の聖人」に指定した。

歴史学者のリン・ホワイト・ジュニア(英語版)は、1968年に発表した『機械と神』のなかで、生態系の破壊に先立つ「地球の危機」を指摘し、その解決法を暗示するものの一つとしてフランチェスコの精神へ立ち戻ることを提起している。

- ④ 新しい法王名: このアッシジのフランチェスコに由来するという新しいローマ法王が誕生した。終身在位制が原則のローマ・カトリックで約600年ぶりに自ら退位したベネディクト16世の後継を決めるコンクラーベは、実に2013年3月19日、1272年ぶりに欧州以外の地域から法王を選び出した。アルゼンチン出身のフランシスコ1世である。フランチェスコ存命当時は、法王への面会は奇跡に近いことだったが、9世紀の時を経て、法王が彼の名を冠するほどになった。

●見做すべき思想:

- (1) 万物兄弟の思想: フランチェスコに関する文献資料は数多くあり、そのなかには師を偲ぶ弟子の修道士たちによって記された、『聖フランチェスコの小さい花』(I Fioretti)と題する14世紀完成の伝記があり、多くの人に親しまれている。そこに記されたフラン

チェスコの生き方は、まさに「**托鉢修道士の鑑**」である。

また、フランチェスコの思想の性格をよく表したものに、彼の死の床で歌われたという有名な「**被造物の賛歌**」がある。この参加は、「もの皆こぞりて み神をたたえよ、光のはらから(同胞)なる日をたたえよ」という著名な一節から「**(兄弟たる)太陽の賛歌**」と呼ばれることもある。そこでは**太陽・月・風・水・火・空気・大地**を「**兄弟姉妹**」として主への**賛美**に参加させ、**はては死までも「姉妹なる死」として迎えたのである**。フランチェスコ自身の内部では、**清貧と自由と神の摂理(彼にとっての信仰生活の三位一体)**とが分かちがたく結びついており、この三者が調和してこそ、簡素で自然で純朴な、明るい生活を営むことができるのであった。こうしたことから、彼は**西洋人としては珍しいほど自然と一体化した聖人**として、国や宗派を超えて世界中の人から敬慕されている。

フランチェスコにとっては、人類全てのみならず、天地の森羅万象ことごとく、唯一神たる天の父とマリアを母とする兄弟姉妹なのであった。この思想はフランチェスコとその修道会を貫くものであり、フランシスコ会の修道士が「**フライアー**」friar (托鉢修道会)と称される由縁である。このことについて、ピーター・ミルワードは、**フランチェスコは「兄弟」「姉妹」の語を用いることにより、○キリスト教会がイエス・キリストの家族たるべきこと(神を頂点とする三角構造)を主張し、万人さらには万物を同じ家族として遇することによって、当時、商業の勃興と並行して広がりつつあった、×教会制度および国家制度における法的虚礼(縦構造=階級)を排そうとしたものと指摘**。

フランチェスコが求めたものは異端を帰順させたり、いかがわしい聖職者を断罪したりすることではなく、**ただ神を賛美し、小鳥やおオカミなどを含む神のあらゆる被造物を自分の兄弟姉妹のように愛し、福音を伝え、単純と謙譲の道を歩むこと**であった。

(2) 清貧と平和の思想:

フランチェスコの修道生活に関する思想はフランシスコ会の会則によく表れている。フ

ランシスコ会の会則は、当時のベネディクト会の会規とはきわめて質の異なるものである一方、深い部分では互いに共通する特徴を有しており、フランシスコ会士は、**より徹底した従順・清貧・貞潔**に生きた。フランチェスコは貧しさを礼賛することにかけては徹底しており、物質的な豊かさのみならず、精神的ないし知的な豊かささえも認めなかった。ここは、同じ托鉢修道会ではあったが学問や理論の重要性を認めたドミニコ会とも異なる点であり、フランチェスコは「**心貧しいことこそ神のみ心にかなう**」と主張し、修道士に学問や書籍は不要と喝破している。

フランチェスコは、清貧の理想について、これを当時の騎士道と吟遊詩人の言葉になぞらえて、「**清貧の貴婦人**」という擬人法で表現した。つまり、騎士が貴婦人にいんぎんに奉仕し、吟遊詩人が賛美の歌を貴婦人にささげるように、フランチェスコも清貧のために献身することこそ理想と考えたのである。

フランチェスコはまた、**人間にとって本当に必要なものは愛と平和**だけであり、それ以外のものはすべて不要だと主張し、いさかみや対立は“**所有する**”ことに端を発すると説いたように、**その清貧の思想は彼の平和主義と分かちがたく結びついていた**。キリスト教とイスラムの宗教対立の時代、そしてまたキリスト教世界が十字軍の熱狂のただなかにあった時代に、他宗教との対話のため、対立する陣営にみずから赴いている点も注目される。

●その象徴「聖フランシスコの平和の祈り」:

「フランシスコの平和の祈り」と呼ばれる祈祷文は広く知られ、マザー・テレサやヨハネ・パウロ 2 世、マーガレット・サッチャーなど著名な宗教家や政治家が公共の場で引用し、聴衆と共に朗読するなどして有名である。この映画ではラストの歌の歌詞で出てくる。

多くの人がフランチェスコの作と信じていて、そのように書かれた本やパンフレット、ポ

ストカードも数多く存在するが、これはフランチェスコ本人の作ではない。初出は 1912 年のフランス語によるものであり、誤解によって聖フランシスコの作と伝えられ広められたものである。

とは言うものの、博愛と寛容の精神を逆説で説く内容(山上の垂訓に似ている)はフランチェスコの精神をよく表現しているとされており、誤解が解かれることもなく、多くの人々にこの名前で 愛唱されている。

《アッシジのフランシス「平和の祈り」》(私訳)

私をあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、

いさかいのあるところに赦しを、

分裂のあるところに一致を、

疑惑のあるところに信仰を、

誤っているところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

闇に光を、

悲しみのあるところに喜びをもたらす者としてください。

慰められるよりは慰めることを、

理解されるよりは理解することを、

愛されるよりは愛することを私が求めますように。

私たちは、与えるから受け、

赦すから赦され、

自分を捨てて死ぬことで永遠の命を頂くのですから。

(3) 徹底した福音主義:

① 主の召命への献身: アッシジ郊外のサンダミアーノの聖堂で祈っていた時、十字架のキリスト像から「フランチェスコよ、行って私の教会を建て直しなさい」という声を聞く。これ以降、彼はサンダミアーノ教会から始めて、方々の教会を修復していった。当初は文字どおり教会の修繕のことと考えた彼だったが、そのなし遂げた信仰の再建は豪壮な建物とは無縁で、聖書に帰り、真の“キリストの体なる教会”を建て上げることだった。

② み言葉(福音書)への徹底した信従: ある日、ポルツィウクラの小聖堂で行われたミサの中で福音書が朗読され、イエスが弟子たちを各地に派遣する時の言葉にフランチェスコは感動した。「行って、そこかしこで『神の国は近づいた』と伝えなさい。あなた方がただで受けとったものは、ただで与えなさい。帯の中に金貨も銀貨も入れて行ってはならない。旅のための袋も、替えの衣も、履物も杖も、もって行ってはならない」(マタイ 10:5-10) それに従ってフランチェスコは直ちに履物を脱いで裸足となり、皮のベルトを捨てて縄を腰に巻いた。以後、福音書でイエスが命じている全てをそのまま実行し、イエスの生活を完全に模倣することがフランチェスコの生活の全てとなっていた。ここから、彼は「裸のキリストに裸で従った」と言われるようになった。

③ 神の道化師⇒たまものを全て福音のために: フランチェスコが宣教を始めたのは 1208 年もしくは 1209 年のことである。彼は街頭や広場に立ち、聖職者が用いるラテン語ではなく、日常語のイタリア語で聖書の教え、つまり“悔い改めて神の道に生きよ”と説いた。フランチェスコは歌や音楽も利用して、巧みな説話で人々の心を捉えたとされている。そうした芸能的とも言える活動から、フランチェスコは「神の道化師」と呼ばれている。⇒パウロ「福音のためなら何でもする。」(I コリント 9:23)

結び

● 私たちは、信仰生活を経るにつれて、多くを失う。

* 信仰のみずみずしさ

* 救霊の熱情

* 神の愛への感謝と感動

* 兄弟愛(泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶ)

* 祈りと悔い改め

● 代わって、多くの肉的なものが入り込んでくる。

× 神の教会の中にある人間的権威

× 一人の魂の救いよりも、教勢の進展

× 個人も教会も自己保身に走り、真の生きがいや魂の平安を求める地域社会の必要に応えない。

● 今こそ、このフランチェスコの生き方に帰らねばならない。イエスと弟子たちの目指した「キリストの体」づくりに再献身せねば。肉的な衣(信仰歴、地位、財産、権威)をかなぐり捨てて、「裸のキリストに、裸で従う」道を――。